様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　6 月 4 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：17520182
研究課題名（和文）　南チロルの現代ドイツ語文学に描かれた多文化社会に生きる青年

研究課題名（英文）　Jugendliche und junge Erwachsene in der multikulturellen Gesellschaft, dargestellt in der zeitgenössischen Literatur aus Südtirol

研究代表者　今井 敦（IMAI ATSUSHI）
九州工業大学・工学研究院・准教授
研究者番号:10380742

研究成果の概要：

南チロルの現代文学を眺めたとき、次の５つの点に共通の特徴を見てとることができる。(1) いずれの作家も 60 年代まで南チロルで主流だった「郷土文学」を拒否している。(2) タブーとされてきたイタリア割譲後の南チロルの歴史を背景に描いている。(3) 文化の狭間に立たされた人間のアイデンティティの葛藤を描いている。(4) 過剰なまでの言語意識は、「故郷」に対する愛憎やアイデンティティの葛藤と密接に関係している。(5) 彼らの文学には、異なる世界への憧憬を読み取ることができる。

ツォーデラーやグルーバーの小説では特に、「私たち」という言葉で表わされた集合的アイデンティティの意識と、帰属性という枠組みにおさまり切らない唯一無二の「私」を求める心との、内なる葛藤がテーマとなっている。そこに描かれているのは、同質性に基づいた既成グループへの帰属ではなく、雑種的・あいの子的存在としての「私」の新しいあり方を模索する若者たちであり、固定化し、類型化しようとする見方を拒否し、探し続けることのうちに自らの存在意義を見出そうとする若者たちである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	500,000	0	500,000
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,000,000	300,000	2,300,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：ドイツ文学, South Tyrol, アイデンティティ, identity, Joseph Zoderer, Sabine Gruber, Helene Flöss, Sepp Mall

１．研究開始当初の背景

南チロルは、第一次大戦後、サン・ジェルマン条約によってオーストリアからイタリアに割譲された地域であるが、現在もド

イツ語住民が約70％を占めており、自治規約によって民族性の保護とドイツ語使用が保障されていることもあってドイツ語による文学活動が大変活発である。本研究が対象とする当地の現代文学は、地域でのみ受容されるいわゆる「郷土文学」(Heimatliteratur)ではない。南チロルの現代文学は、ドイツ語圏全般で、また他のヨーロッパ諸国でも著名な作家を輩出しており、むしろ「郷土文学」への反発を契機として生まれたものである。その端緒はいわゆる「68･69年運動」にある。イタリア割譲直後から第二次大戦後の長きに渡って南チロルでは「郷土文学」の伝統が連綿と継承されていた。民族主義的世界観、牧歌的農村としての故郷の称揚、社会的問題の忘却を特徴とする「郷土文学」は、1969年、ブリクセンでの詩人ノルベルト・C・カーザーの講演において、徹底的に批判された。この講演が、南チロルにおける現代文学の出発点とされている。カーザーとともに南チロルの民族主義的、カトリック的、画一主義的伝統から距離をとり、こうしたものへの批判的立場から作品を書いたのがヨーゼフ・ツォーデラーである。（ただし忘れてならないことだが、カーザーにしろツォーデラーにしろ、テクストの文学的質、すなわち言語芸術としての完成度ゆえに作家として評価されているのであって、作品中に表れた歴史的、思想的、社会的背景はあくまで「背景」に過ぎない。）その後、80年代にはアニータ･ピヒラー、90年代には、ヘレーネ・フレス、ゼップ・マル、ザビーネ･グルーバーといった作家たちが登場している。多くの作家たちに共通して見られるのは、文化の狭間に立たされた人間のアイデンティティの問題、二言語（ラディン語を含めると三言語）が併用される環境での精神的発達の問題、偏狭な村社会や民族主義との葛藤といったものである。オーストリア文学の一領域として、南チロルの文学はドイツ語圏において確固たる地位を持っているのに対し、日本国内ではこれまでほとんど研究されることがなかった。

２．研究の目的

南チロルという地域に特有の現象や問題を指摘し、その解決策を考えることが目的なのではない。そうした地域性や特殊性の内に典型的な形で表れた、現代人にとっての普遍的な問題を浮き彫りにすることが目的である。南チロルの現代文学は、近い将来訪れるであろう多言語・多文化社会の中で、一人一人の人間がどんな問題に直面するか、若者たちがどんな問題を抱えることになるかという点について、多くの示唆を与えてくれるであろう。

３．研究の方法

当研究は、多文化社会に生きる人間、特に青年や若い大人たちの心理を文学を通じて明らかにしようとするものである。厳密かつ批判的なテクスト解釈を研究の方法とし、補足的に作家たちへのインタビューも行う。対象となる作家及び主な作品は下記の通り。

1) Norbert C. Kaser: *Gesammelte Werke.* 3 Bde. Haymon, Innsbruck 1988.

2) Joseph Zoderer: *Das Glück beim Händewaschen.* Roman, Hanser, München 1982 (Erstveröffentlichung:1976).

3) Joseph Zoderer: *Die Walsche.* Roman, Hanser, München 1982.

4) Joseph Zoderer: *Der Schmerz der Gewöhnung.* Roman, Hanser, München 2002.

5) Joseph Zoderer: *Der Himmel über Meran.* Erzählungen, Hanser, München 2005.

6) Sabine Gruber: *Aushäusige.* Roman, dtv, München 1999 (Erstveröffentlichung: 1996).

7) Sabine Gruber: *Die Zumutung.* Roman, C.H.Beck, München 2003.

8) Sabine Gruber: *Über Nacht.* Roman, C.H.Beck, München 2007.

9) Sepp Mall: *Wundränder.* Roman, Haymon, Innsbruck/Wien 2004.

10) Helene Flöss: *Schnittbögen.* Roman, Haymon, Innsbruck/Wien 2000.

11) Helene Flöss: *Löwen im Holz.* Roman, Haymon, Innsbruck/Wien 2003.

４．研究成果

南チロル、正式名称で言えば、「ボーツェン＝南チロル自治県(Autonome Provinz Bozen-Südtirol)」は、イタリア割譲当時、人口約24万のうち90パーセントがドイツ語を話す住民であり、4パーセントが、レト・ロマンス語の一種のラディン語を話す人びと、そして3パーセントほどがイタリア語住民であった。しかしファシズム政権下において徹底したイタリア化政策が進められ、ドイツ語の授業は禁止、ドイツ語の苗字や名前もイタリア語に改めさせる措置がとられた。一方で、

大勢のイタリア人労働者の入植政策が進められ、1910 年には 7 千 3 百人に過ぎなかったイタリア人の数は、1939 年には 8 万人を越えた。この年ナチス・ドイツとファシズム・イタリアのあいだで結ばれた協定により、1943 年までのあいだに約 7 万 5 千人がドイツ国内に移住している。

第二次大戦後、南チロルは、住民投票を認められないままイタリア領にとどめられたが、オーストリアとイタリアのあいだで協定が結ばれ、母語による授業、ドイツ語とイタリア語の同格化、民族性の保護、自治権の付与などが約束された。しかし、ドイツ語住民はイタリア政府がこの約束を実行していないと受け止め、一方でイタリア人の入植政策は継続されたため、自治を要求する住民運動が高まって、国連で審議されると同時に、一連の爆破テロ事件をも引き起こした。1969 年、イタリア政府が大幅な自治権を南チロルに認めたことで合意を見たが、そのとき約束された法的措置が順次実現され、自治制度がほぼ完成するまで、20 年以上の歳月を要した。南チロル問題の解決が国連に報告されたのは、1992 年のことである。

現在の南チロルは、自治制度の下、とりわけ観光業の隆盛のおかげで、イタリアでもっとも裕福な県の一つとなっている。反面、ドイツ語住民とイタリア人の軋轢は大きな社会問題であり、住民は常に、チロルの文化とイタリア文化、そして、ドイツ語、イタリア語、ラディン語という三つの言語が交錯する中で、日々を暮らしている。

さて、南チロルの現代文学について考察する際には、何を持って「南チロルの文学」と言うのか、定義の問題に触れなければならない。ここで「南チロルの文学」と言うのは、南チロル出身の作家が書いた文学テクストの中で、南チロルという、歴史的、文化的、言語的に見て独特な環境が、表現面または内容面で大きな役割を果たしているテクスト、しかも、地元のみならずドイツ語圏全般で評価の高いものである。

ドイツ語では、Südtiroler Literatur とか、Literatur aus Südtirol、Literatur in Südtirol など様々な呼び方があるが、上記の意味では、Literatur aus Südtirol と呼ぶのがもっとも適切である。なぜなら、当研究の対象となった作家たち自身は、地域文学として括られることに抵抗感を示しており、Südtiroler Literatur あるいは Literatur in Südtirol と言った場合、地元でしか受容されない地域文学のニュアンスが付きまとうからである。彼らは、自分たちの書いたテクストが「郷土文学」とみなされることを嫌っており、また、いわゆる「少数民族の文学(Minderheitenliteratur)」に属するとも考えてはいない。現在の南チロルは、他のドイツ語文化圏から切り離されているわけではなく、自治制度が確立している今、他の文化に脅かされているわけでもないからである。

そうした前提の上で、南チロルの現代文学を眺めたとき、次の 5 つの点で、南チロルという多言語・多文化社会に特徴的なものが現れている。第一は、いずれの作家も、60 年代まで南チロルで主流であった「郷土文学」に否を唱えているということ。第二は、イタリア割譲後の南チロルの歴史を背景として描いているということ、第三は、文化の狭間に立たされた人間の心理的葛藤、とりわけ帰属性やアイデンティティの葛藤を描いていること、第四は、南チロル人の言語的劣等感が繰り返し描かれ、過剰な言語意識が、「故郷」に対する愛憎と密接に関係していること、そして第五点は、彼らの文学には、異なる世界への憧れ、新しいアイデンティティへの憧憬を読み取ることができるということである。

南チロルの現代文学の出発点とされているのは、1969 年に詩人ノルベルト・C・カーザー(1947-78)がブリクセンで行なった講演『過去二十年間および将来の南チロルの文学について』である。この講演は、新しい世代による古い世代への挑戦状と言える。カーザーは、当時南チロルでもてはやされていた幾人かの作家と一人の独文学者を槍玉にあげ、戦前、戦中、そして戦後も中断されることなく書かれてきた凡庸な「郷土文学」の伝統、そこに表現されたゲルマン・ナショナリズム、カトリック主義、画一主義を批判した。

カーザーの批判の背景には、自治権獲得のために県政府が進める住民総動員的政策への反発という側面と、国際的な 68 年運動（院外野党運動）への呼応という二つの側面がある。自治権を求めた一連の交渉の中で県政府は、南チロルの文化がドイツ的である点を強調しており、文化政策においても保守的、民族的なものを奨励していた。つまり、当時の南チロルでは文学もまた、政治の道具とされたのである。また、南チロルの言論・出版界は当時、ドイツ語日刊紙「ドロミーテン」とその出版社アテージアが牛耳っており、民族主義的、カトリック的傾向が顕著だった。

上述の講演の中で、カーザーが、南チロルの新しい世代の作家として期待を寄せた一人が、ヨーゼフ・ツォーデラー(1935-)である。ツォーデラーは院外野党運動に係り、カーザー同様南チロルの「アパルトヘイト」（イタ

リア人に対して差別的な自治制度をカーザーやツォーデラーはそう呼んだ）に批判的であった。とはいえ、ツォーデラーが評価されるのは何をおいてもテクストの文学的質ゆえである。ツォーデラーの作品の中でもっとも評価されているのは、最初の二つの長編小説、『手を洗うときの幸福』(*Das Glück beim Händewaschen,* 1976*)* と『イタリア女』(*Die Walsche,* 1982*)*である。

『手を洗うときの幸福』は、自伝小説、あるいは私小説と言ってよい。青年期を迎えた主人公が、厳格な規則の支配する寄宿学校の中で、「私とは誰なのか、どこから来て、どこへ向かっていくのか」という「私」を巡る問いに目覚める過程を描いたものである。周囲への順応と反抗のあいだを揺れ動く不安な青年心理が「私」自身の視点から語られる。

主人公は南チロルのメラーンに生まれたが、39 年の協定のため幼少期に家族ともどもグラーツに移住した。戦後、思春期にさしかかったころ、スイスのイエズス会系寄宿学校に入学する。国籍記載のないパスポートを持つ彼のもとにある日イタリアの旅券が届けられるが、生まれ故郷である南チロルを訪れた彼は、そこがまったく見知らぬ土地であり、自分がそこでもまたよそ者であることを痛感する。家では南チロル方言で話し、グラーツではグラーツ方言を身につけ、学校ではスイス・ドイツ語で話す彼であるが、南チロルに入る際、国境でイタリア語で話しかけられると、自らの国籍、見知らぬ故郷、話している言葉の不一致によって、「私」に対し、大きな不安に陥ってしまう。物語の中で主人公は、南チロルの歴史や自家の漂流について知り、言語、故郷、歴史といった枠組みの中に幼少期の断片的記憶を統合させようと試みることによって、社会的･心理的「私」を構築しようとしていく。そうした青年期の心理的作業を主人公自らが語り手として後の視点から「書く」ことは、「私」の社会的承認としての機能を持つことになる。

ツォーデラーの次の長編小説『イタリア女』は、1981 年のバッハマン・コンクールで高く評価されたものである。この小説は、南チロルに並存する二つの社会、ドイツ語住民とイタリア人の社会のあいだに立たされ、どちらに属することもできない人間の内的葛藤を描いている。主人公オルガは、南チロルの小さな農村に生まれ、ドイツ語を母語としているが、16 歳のとき母親とともに家を飛び出し、今はイタリア人ジルヴァーノとボーツェンのイタリア人街で同棲している。父の死の知らせを受け、葬儀のため故郷の村に帰った主人公のわずか三日間の心象風景を百ページ余りにわたって綴ったのがこの小説である。オルガの意識に浮かぶ様々な想念が、出来事の時間的前後関係にはこだわらず、浮かんだままに語られている。

ドイツ語を話す農民たちの狭く閉鎖的な社会に戻ってきたオルガは、イタリア人と同棲しているがゆえに「イタリア女」と罵られる。ところが彼女はイタリア人に囲まれているときもやはりよそ者であり、「ドイツ人」とみなされる。母語のようにはイタリア語を操ることができず、恋人にさえ、本来の意図とは違った風に解釈されて、滑稽な人物だと思われる。

オルガは、周囲の人びとが持つ「ドイツ的」とか、「イタリア的」といったイメージに自分を適合させることができない。周囲が見た「オルガ」と、彼女自身の自己理解は一致しない。オルガは、「ドイツ人」、「イタリア人」、あるいは「同郷人」といった型どおりのグループから遊離した存在なのであるが、周囲は常にグループの枠に嵌めて彼女を捉えようとする。彼女が自己疎外に陥るのは、いずれのグループにも属さないからではない。本来自分には当て嵌まらないグループへ、互いに相容れないグループへと無理にも分類され、その一員として解釈されてしまうからである。それらの類型から切り離した唯一無二の人間として受け止めてくれる者がいないのである。彼女はつねに周囲が期待する「オルガ」を演じなければならないが、この「オルガ」は、連続性のない、矛盾した、分裂した存在であって、これにより彼女の自己理解もまた不安に陥ることになる。

この小説では、葛藤する主人公の姿が肯定的に描かれているのに対し、村人たちの多くは料簡の狭い排外主義者として登場する。南チロルのドイツ語社会が持つそうした閉鎖性を内部告発した作品としてこの小説が受けとめられた結果、作者ツォーデラーは、長きに渡って南チロル内では「裏切り者」とみなされることになった。

その他の作品も含めツォーデラーのテクストには、それを愛着と言うにせよ反発と言うにせよ、故郷への過剰な意識と、異なる世界への憧れ、旅立ちといったモチーフを見出すことができる。こうしたモチーフは南チロルの現代文学に多く見られるものであるが、90 年代に作家として登場したザビーネ・グルーバー(1963-)の最初の長編小説『帰らぬ子ら』(*Aushäusige,* 1996)には、そうしたモチーフが顕著である。その点で、『イタリア女』の続編といった性格も持っている。

『帰らぬ子ら』の主人公は、南チロルの果物農家に生まれ育った兄妹である。学業を終えたあと、兄アントンはヴィーンに出てジャーナリストとして働き、妹リータはイタリア人の魚屋エーニオと結婚して、ヴェネチアに暮らす。当初、憧れのヴェネチアに住めることを喜び、本物のイタリア人になるべく努力したリータであるが、呑んだくれで自堕落な夫に嫌気が差し、プライヴァシーのないヴェネチアの狭苦しさにも耐えられなくなって、夫を捨て、ヴィーンの兄のもとに身を寄せる。が、そこにも自分の居場所を見出すことができず、結局また、旅立っていく。兄アントンも、ヴィーンでジャーナリズムの世界に特有の因習にぶつかり幻滅を覚えるが、妹同様、父が待つ南チロルの実家に帰ることはちっとも考えない。こうした内容が、章ごとにリータとアントンの視点から、交互に語られる。

この小説も、「よそ者」としての主人公の内的葛藤を描いた物語として読むことができる。葛藤の一因となるのはやはり言語である。主人公二人は、言葉が軽視され、沈黙が美徳とされる故郷を去り、新しい言語を獲得することによって新しい自分を見つけようとする。アントンはヴィーンで標準ドイツ語を身につけ、リータはヴェネチア方言を使いこなすことによって新しい故郷を作り上げようとする。だが、このときの彼らは南チロルという古い型から飛び出しはしたものの、同じように既存の別の型に自分を嵌め込もうとしたにすぎない。時とともにヴィーンもヴェネチアも、南チロルで感じたのと同じ狭さと陳腐さを露わにする。故郷で彼ら二人を苦しめた村社会は、村のみに特有のものではなかった。ヴェネチアでも、ヴィーンでも、それぞれの類型化された物の見方が人々の世界観を支配し、「私たち」という言葉で表される村社会の仲間意識は、人々の意識の中に硬く巣食っていたのである。

初めのうちアントンもリータも、既成の「私たち」に属そうと努めていた。「ヴィーン人」というグループ、「ヴェネチア人」というグループ、型どおりの均質な「私たち」、つまり「地元の人びと」になろうと努めたのである。しかしリータはそれが無理なことに気づく。リータは以後、「私たち」に同化することを徹底して拒む。彼女は、幸福を、故郷を、いつもほかのどこかに探し続ける人となる。二つの世界を股にかけて生きるという意味で彼女は境界人（Grenzgängerin）であり、既成の不変な定式としての「故郷」、「家」を飛び出し、新しい可能性を求め彷徨う人という意味で、「帰らぬ子」である。彼女は常に彷徨い続け、どこにも自分の家を築こうとしない。ひとたび築いた我が家も、それが凝固する気配を見せた途端、飛び出してしまうのである。

ゆえに、『イタリア女』と『帰らぬ子ら』のテーマとなっているのは、「私たち」という言葉で表わされた集合的アイデンティティの意識と、帰属性という枠組みだけでは捉えきることのできない唯一無二の「私」を求める心との、内なる葛藤である。そこに描かれているのは、同質性に基づいた既成のグループへの帰属ではなく、雑種的・あいの子的存在としての「私」の新しいあり方を模索する若者、固定化し、類型化しようとする見方を拒否し、探し続けることのうちに意味を見出そうとする若者たちの姿である。

南チロルの現代文学によく見られるのはまた、南チロルの現代史を背景にした作品である。グルーバーより九歳年上で、ブリクセン生まれのヘレーネ・フレス(1954-)は、歴史に取材した小説を多く世に出している。その一つが 2000 年に発表された長編小説『型紙』（*Schnittbögen*）である。この作品は、1930 年代から 40 年代にかけて、つまり、第二次大戦を挟んでファシズムとナチズムのあいだで揺れた南チロルを舞台としている。枠物語であるこの小説は、90 年代に再会した二人の老女、エルザとオルガが対座する場面から始まり、同じ場面で終わっている。枠の中身となっているのは、エルザが若き日に書いた日記や、出征した恋人がオルガに宛てて書いた沢山の手紙である。ここに描かれているのは、悲惨な時代を自分なりに生きた、二人の対照的な女の姿であり、この二人と周囲の人びとを通じて、政治や戦争という大きな出来事に翻弄された小さな人びとの内面が淡々とした筆致で浮き彫りにされている。フレスは 2003 年にも歴史に取材した小説『木の中のライオン』（*Löwen im Holz*）を出版し、第一次大戦時のドイツ語住民やラディン人、イタリア人、そして捕虜としてこの地に来たロシア人たちの姿を描いている。

時代を下って、南チロルの爆破テロ事件を背景にした小説を書いたのは、ゼップ・マルである。1955 年生まれのマルは、エッチュ川の源、すなわちオーストリア・チロルとの国境に近い村グラウンの出身で、2004 年に発表した長編小説『傷跡の縁』(*Wundränder*) は、フレスの小説同様、政治に翻弄される弱い立場の人びとを描いたものといえる。背景となっているは、60 年代に南チロルで荒れ狂った一連の爆破テロ事件で、南チロルのオーストリア返還を求め、急進的活動家たちが起こし

たものである。とはいえ、小説の中心に描かれているのは死んだ活動家の残された家族である。簡単にまとめればこの小説は、南チロルのイタリア帰属とかオーストリア帰属といったナショナリズムの思想や運動が、そうした思想とはまるで関係のない人びとを不幸にしていくさまを描いている。

ナショナリストたちの主張をよく理解できず、民族性の違いといったものに何のこだわりも持たない十二歳の少年パウルと、逆に、どもりであるがゆえに自己表現がままならず、爆破テロという暴力的手段のうちに抑圧的国家や多数派に対する自己主張の方法を見出すようになる青年アレクサンダーが、対照的な若者として、しかし両者とも犠牲者として描かれている。小説はパウルの視点から語られた部分、アレクサンダーの姉の視点から語られた章が交替する形で進む。

フレスの二つの小説とマルの小説は、歴史に対する見方に明らかな共通性がある。それは、ドイツ的な故郷を防衛する、とか、「ここはイタリアなのだ」(Siamo in Italia)といった主張に表れた、ナショナリズムへの懐疑である。これはまた、68 年運動に出発点をもつ現代南チロルの文学におおむね共通する傾向ともいえる。

以上、研究成果について具体的に述べた。発表論文は下に記すとおりである。これに加えて、平成 19 年度から平成 20 年度にかけて、ヨーゼフ・ツォーデラーの小説『手を洗うときの幸福』(原文全 170 頁）を全訳した。その一部は著者の了解を得て雑誌『かいろす』に発表したが、残りの部分を含めた翻訳のすべては、近いうちに出版予定である。

なお、本研究と密接に関係した研究の成果として最後に触れておきたいのは、ハインリヒ・マンの長編小説『ウンラート教授』の翻訳である。作家ハインリヒ・マンが南チロル滞在中に起草した小説『ウンラート教授』(*Professor Unrat*, 1905) は、二つの民族の狭間にあった際のマン自身の心理的葛藤を契機に執筆されたものであり、マンの内面におけるイタリアとドイツ両文化の衝突を背景に持っている。このテーマはマンの次作『人種の狭間で』(*Zwischen den Rassen*, 1907)に繋がって行くものであるが、『ウンラート教授』についての論文を二本、当研究期間中に執筆・発表し、小説の全訳（全 316 頁、松籟社）を期間中の平成 19 年に出版したことを付記しておく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

①<u>今井敦</u>「「私」を巡る問いの発見―ヨーゼフ・ツォーデラーの小説『手を洗うときの幸福』―」西日本ドイツ文学 20 号(2008 年)25-38 頁　査読有

②ヨーゼフ・ツォーデラー作、<u>今井敦</u>訳、「手を洗うときの幸福(二)」(翻訳)、かいろす 46 号(2008)(1)-(18)頁 査読無

③<u>今井敦</u>「南チロルの現代ドイツ語文学」九州工業大学研究報告〔人文・社会科学編〕56 号(2008 年)25-33 頁 査読無

④ヨーゼフ・ツォーデラー作<u>今井敦</u>訳「手を洗うときの幸福(一)　」(翻訳)かいろす 45 号(2007)(1)-(13)頁 査読無

⑤<u>今井敦</u>「作家ヨーゼフ・ツォーデラーを訪ねて―短編集『メラーンの空』(2005)試論―」九州工業大学研究報告(人文・社会科学) 55 号(2007 年)35-46 頁 査読無

⑥<u>今井敦</u>「小説『ウンラート教授』と映画『嘆きの天使』―ハインリヒ・マン『ウンラート教授』百年（その２）」―九州工業大学研究報告（人文・社会科学）54 号(2006)19-29 頁 査読無

⑦<u>今井敦</u>「ウンラートとは誰だったのか　―ハインリヒ・マン『ウンラート教授』百年（その１）」―西日本ドイツ文学 17 号(2005)1-16 頁 査読有

〔学会発表〕（計 1 件）

<u>今井敦</u>「南チロルの現代文学事情」日本独文学会西日本支部第 59 回総会・研究発表会(2007 年 12 月 8 日)於山口大学（山口市）

６．研究組織

(1)研究代表者

今井 敦（IMAI ATSUSHI）
九州工業大学・工学研究院・准教授
研究者番号:10380742

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし